



1993 年 (平成 5 年)
4 月号 (No. 575)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

- 背理を生きる自然保護
………筑木 力…(1)
海外の山………(2)
「ジャヤ峰の実験」
韓国山岳会との会談に関する報告(下)
………(3)
「山岳総合索引」の刊行………(4)
計報 小野 幸氏………(5)
女性懇談会より………(5)
東西南北………(6)
「すべての会員に考えてもらいたい
こと(2)」「日本山岳会土曜会と婦人
部の思い出」「山と自然の断章(1)」「
ナムチャバルワ登山隊日本スポー
ツ賞優秀団体に」ほか
報 告………(11)
「第二回中高年登山対策全国大会
(上)」「南極旅行」「道志二十六夜山
忘年山行に参加して」「土曜会初の
会外遠征」ほか
自然保護随想………(12)
会務報告………(16)
二月定例理事会、ルーム日誌、会員
異動、山研・ナムチャ合同募金応募
状況、新入会員(復活)、住所・住
居表示変更
書籍・雑誌受入報告………(18)
お知らせ………(18)

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテロップ電話

3234
六六五九

背理を生きる自然保護

筑木 力

いまエベレストでも環境汚染が深刻化している。登山隊が軽装で速く下りようとするあまり、長年に亘って各ルートに投棄した酸素ボンベ、テント、ロープ、食糧などの残骸がゴミとなって膨れ上がり、サウスコルやベースキャンプ地の周辺が特にひどいという。エベレストなら「身の安全を図るため装備を捨てても速やかに下山せよ」と促す要請が、「自分の持ち込んだモノは必ず自分が持ち帰れ」と迫る倫理よりも優先するのか。生命に関わる極限状況ではキレイ事の原則論なんかは構っていられないかもしれないが、そんなにムリしてまで登るのは間違い

ではないのか。そのムリが積み重なって、環境汚染というツケが回ってきているのである。

一九五三年五月ヒラリーとテンジンが人類最初のエベレスト登頂を成し遂げた時点では、そんな汚染など誰も予測しなかった。日本の山も同様である。我々の先達が開拓者精神に燃えて未知の山々に次々と挑み、登頂に成功してその魅力を世に紹介してくれたおかげで、人々の心に山への憧憬が生まれ登山熱が高まった。やがてそれは高度経済成長等の社会的要因と複合して、現在の大衆登山ブームをもたらしに至った。エベレストはヒラリーやテンジン

を始めとするパイオニアたちが、また日本の山岳は我々の諸先輩が、昨今のブームに火を付けたともいえる。かつて高い志を抱いて聖域と崇めた山に入り、あえて困難を求めて所期の目的達成に邁進したエリートたちのアルピニズム志向は、今では他人が登るから自分も登るとする大衆的な他人志向による低次元の動機へと低落して、当初は考えられもしなかった様々な問題(遭難の多発や環境汚染はその一例)が生じているのである。

ヒラリーは「エベレスト入山を五年間禁止せよ」といま嘆く。わが国の尾瀬も登山の次元がエベレストと違わない、入山規制が検討されている。

日本山岳会も登山を通しての自然保護活動にとり組んでいるが、山岳人が過去に行なった行為と、その行為がもたらした結果としての現状と、その現状

をも償わされているのか。未来世代に対する我々の責任を考慮する場合、この点をきちんと検証しなければならぬ。

さらに登山以外でも自然保護の上で気掛かりな社会現象が目につく。全国各地で花と緑を慈しむ活動が輪を広げる一方で、イベントの会場造りのため安易に樹木を切り倒す行為がくり返されるのはなぜか。それぞれ現地固有の事情があるにしても、結局人間は自分の都合がいいように草木を利用していただけではないのか。直接的・短期的視野でしか人間は自然と付き合えないという点で、この現象もエベレストのゴミ汚染と同根である。

こう見てくると、山の自然を守るには汚染源の登山をやめさせるしかない、自然環境を保護するには破壊源の人間を減らすしかないという、衝撃的

を踏まえた未来への展望とを、歴史的視点から総点検する必要がある。我々は祖先から譲り受けた財産を食い潰しているだけなのか。それとも祖先が回したツケ

な背理に到達する。今まで人類滅亡の予言は禁忌とされてきたが、近ごろそれが破られることがある。平成四年の正月NHKテレビのトーク番組で、二人の有名文化人が対談しながらいづれ人類は滅ぶと明言していた。ビートたけしも最近某雑誌で、「地球にやさしくしたかったら人間殺せ」と彼一流の警句を吐いている。彼より前に私も『山岳(一九九一年)』で「地球にやさしい」という文言に、別の観点から疑問を投げかけた。ほんとうは地球より人類がもっと危いのである。地球が崩壊したり消滅したりすることはまずない。人類が絶滅しても地球は存続するだろう。だからそのときは人類に代って次の主役として登場する「種」に、いさぎよく地球を託そうと覚悟をきめたとしても、現実にはいまなお我々は生き続けていかねばならぬ以上心の拠り所を必要とする。人類絶滅の背理を超えて生きる実践知が求められるのである。

人間の行為が立脚する原則と、その原則が現実を媒介して具体化される実践とは次元が異なる。現実の事象にどんな原則を適用しても、明快に割り切れない剰余がある。そうした剰余(例えばタテマエに対するホンネ)への対応が、応用問題として必ず付随する。自然保護にとり組む場合もこの事を念頭において総論から各論に精力的に踏

海外の山

ジャヤ峰の実験

インドシナのイリアンジャヤ州のローレンツ保護地区に、ジャヤ山群がある。現地では、ジャヤウイジャヤ山群と呼ばれ、カルステンツ・ピラミッド(四八八四呎)と、ジャヤ峰(四八六二呎)に代表される。前者は、オセアニア地域の最高峰とされ、九二年六月、田部井淳子、インドネシア大学山岳部OB二人と登ったことは、記憶に新しい。

この三月、ジャヤ峰で日本とインドネシアの学生合同登山が行われた。メンバーは、明治大学探検部の橋本康(二三)ら日本側六人と、イリアンジャヤ唯一の国立大学、チャンドラワシ大学のリチャード・カリラゴ(二八)ら四人の計十人。いきさつが変わっている。

明大探検部のメンバーたちは、当初はイリアンジャヤでのキリスト教宣教師の活動とその影響、あるいは住民たちの文化人類学的調査を分担してやろう、と考えていた。それが、一九九一年、州都ジャヤプラにあるチャンドラワシ大学の「マピア」と呼ばれる自然愛好グループと知り合ったことで「合同登山」の話に発展していったのだ。

「一緒に何かをやりたい、と始めたことです。登山を第一目的とする登山ではなかった。あくまで、互いの友情を深めるための登山でした」と、橋本は語る。

ジャヤ峰自体は、一九三六年にオランダ隊によって初登頂され、日本人でも、一九六四年、加藤泰安らが、そして九〇年には冒険スキーヤーの和田好正が登っている。

しかし、チャンドラワシ大学の学生たちは、登山の経験はほとんどなかった。橋本たちは、日本の山で自身氷壁クライミング技術を学んだあと、九二年中に三回、現地を訪れ、基礎的な訓練をやった。

そして、いよいよ「本番」。登山は、イラガという村からの、一週間のニューギニア高地キヤラバンから始まった。三月三日、標高四一〇〇呎のベースキャンプ地に着く。ここから三日をかけてルート工作をした。

「頂上近くの二百呎が、最高六十度の雪壁になっているので、慣れぬチャンドラワシ・メンバーのために、百五十呎ほどはザイルをフィックスした」

ユマールを使つての登攀では、慎重を期して明大のメンバーが、確保した。最後頂上直下のナイフリッジは、カッティングで足場を作りながら、登る。「まさか、あんな所を登るとは思わなかった」と、後で、「マピア」のメンバーは言った。

七日に一次隊の五人(うち二人がインドネシア学生)が登頂し、九日にも残る全員が登頂した。山頂にチャンドラワシ大学の旗が初めてひるがえるのを見て、感激のあまり泣き出す学生もいた。

通訳などいかなかった。言葉は、日本側が覚えたインドネシア語を中心に進んだ。政治や環境問題などデントの中でも会話も貴重な収穫だった。

「技術的には確かに、こちらがリードしたけれども、教えられたことは実に多かった。何よりも、同じ学生として語りあえたのが嬉しい」と、橋本は結んだ。

異境の山をガイドとはなく、同じ世代の土地の人と共に登る、その発想がいい。

(江本嘉伸)

み込んで、実状に見合う解答を出さなければならぬ。

ブラジルでの地球サミットでは、「持続可能な開発」という至難な課題が採択された。地球環境保全への道は極めて険しい。我々が個人としてまた集団としてそれぞれ背負う背理を自覚し、

韓国山岳会との会談に関する報告(下)

(兼・北アルプス山小屋協会総会出席の報告)

大森弘一郎

一九九三年二月二十三日高山にて、北アルプスのある三県(富山、長野、岐阜)五ブロックの山小屋経営者と、環境庁、山岳警備隊、営林署、約六十名の会合が行われた。これに藤平副会長、河西委員と出席して先般訪韓の報告と、「外国人に日本の山のルールを知ってもらう対策」の試案として、下記の文案と、この韓国語訳と、これを地図に組み入れた試作品を提示し、対応策をどのように整備するか、習慣の違いをどう理解するか、来日する隣国の登山者に好印象を土産にしようののにどうしたらよいか、などを話した。

皆さん問題と思いつつ、対応策に手をこまねいていたところに、我々がいろいろと行動し、具体的な案を示したことに好感をもたれ、さっそく各ブ

善意をもって生きる営みを実践しながら、誠実に生きる道を探索していくことによって、背理に生きながら背理を超える活路が開けてくる。自然保護の問題を考えるとときつくづくそう思わずにはいられない。

ロックの代表二名ずつで十人委員会が作られ、二十四日にかけて具体的な打ち合わせが行われた。

資金問題、地図で作るとなると入れる地域の調整が大変、など結論を得るまでに時間がかかると思われるので、この際はとりあえず、まず十人委員会の意見を取り入れてJACで文章を完全なまとめ、これを英語・韓国語・中国語に訳して四ヶ国のルール文をまとめ、版下に使える原稿を作り、これをJACより各山小屋の経営者に配る。これをそれぞれが持つ手段、例えば小屋の壁への提示、パンフレットを作るときに、などに利用することとした。

前号でご報告した訪韓時に纏めて今回提案した《美しい日本の山へようこそ》の文章の原案を以下にご覧に入れる。既に十人委員会による意見を参考

にこれに手を入れてあるが、これからもさらに修正が加えられると思うので、最終に仕上がった段階で再度ご報告したい。これから十人委員会との間で検討されることは、登山届の窓口、登山保険、絵による案内標や、外国人一〇番についてである。

地図その他の案についての作成は、状況を見ながら次回考えることとした。(地理院の地図を使う場合は広告が入れられない。航空写真を使い広告を取ることも考えてみる。)

《美しい日本の山へようこそ》

私たちの日本の山は美しい反面、土が軟らかいため非常に傷つきやすく壊れやすい性質を持っています。登山者が増えた今、国民が皆で「自然保護憲章」というものを作って、これを守るよう努めています。その推進をします。皆様にもどうか私たちの活動に参加して頂き、日本の美しい山を十分に楽しんで下さいませよう、お願い致します。

そのための八つのお願い(夏山用)

①山の中では決められた道を歩き、道のわきの草原やお花畑には入らないようにお願いします。

(日本の山は、ほとんどが国立公園で、人の多いところ以外は、禁止の立て札や、ロープがありませんが、登山道以外への立ち入りは全て禁止

されています。)

②高山植物を採らないで下さい。花は写真で撮ってお持ち帰り下さい。

(美しい高山植物は非常に弱い植物です。少しの破壊が広がって、植生全体が壊れてしまいます。これらの植物は、数千年の昔から今日まで可憐な花を咲かせています。これを今後も永く残したいというのが、私たちの気持ちです。)

③余った食料やゴミは、残さず、お持ち帰り下さい。もちろん煙草の吸い殻も。

(日本人には、他人が残したゴミも拾い、自宅まで持ち帰るように勧められています。皆さまの場合は、ご自分のゴミを麓の旅館までお持ち帰り下さい。山の中でゴミは仲々腐りません。肥料にはならず、むしろ高山植物や動物に悪い影響を残します。保存食でも小屋に残すと動物のえさになり、ゴミを散らす事になりますので、お持ち帰り下さい。山の中のゴミを拾っている人達がありますが、彼らは無償のボランティアです。)

④天幕はテント指定地に張って下さい。(登山者が増えたため、テント指定地以外に張ってはいけなくなりました。有料の場合は、これが管理費に使われていることをご理解下さい。)

⑤ 水場を汚さないように、山の中では、洗剤は使わないで下さい。

（水場の下にはまた水場があります。洗剤やシャンプーは水をひどく汚し、植物に悪い影響を及ぼしますので、下山してからゆっくり洗って下さい。）

⑥山の中のたき火は禁止されています。山小屋での火の始末も十分にお願います。

（小屋の中の煙草の後始末を十分に。山小屋の火事は水が無いので消せません。また登山者の生命にもかかります。）

⑦ 山小屋では、早寝、早起、早出が原則です。

(日本の山の天気は、朝は良く、午後は悪くなるのが普通です。ですから登山者はみな早寝です。皆様の安全のためにも、同じように早寝をお願いします。山小屋の人の意見をよく聞き、行動の参考にして下さい。)

資料寄付のお願い

登山の用具、記録等、整理する
時考えて見て下さい。他に寄付す
る前に山岳会へ。捨てる前にも再
考を。

資料委員会

資料委員会

⑧安全のために登山届をお出し下さい。保険の確認もお忘れなく。

(登山届は入山前に〇〇〇へお出し下さい。旅行保険をお確かめ下さい。保険は万が一の出費からあなたを守ってくれます。)

そのための八つのお願い（雪山用）

①日本の冬山は非常に厳しい世界です。

（日本海から送られてくる雪のため、積雪が多く、偏西風も強い。そのためヒマラヤ並みの困難さの、雪崩と風雪との世界に急変することが良くあります。）

②雪山のシーズンには山小屋は閉まっています。

（地図にある山小屋も、夏山のシーズン以外はほとんどが閉まっています。いつまで、またいつから使えるかは、登る前に良く調べて下さい。積雪期はまず使えません。）

③登山ルートも地図にある登山道と全く変わります。

(天候により、条件は一変します。雪崩の出やすい沢すじを避けて、安全な登山を目指して下さい。)

④ 山小屋の屋根には上がらないで下さい。

（ソーラパネルが張ってあることが多く、また屋根のうえを汚すと、春に、天水を取るとき汚れることにな

ります。

⑤雪山では、何も残さないで下山するよう特に気を付けて下さい。

(雪の上ではゴミ等が隠れて気づかないことが良くあります。雪の下には高山植物が眠っていることを忘れないで下さい。)

⑥緊急事態で止むを得ず小屋を使った時。

(テントが飛ばされたり、というよ
うな、生命にかかわることも有り得
ます。小屋に避難用の部屋があると
きは、これを使って下さい。それが

無くて止むを得ず小屋に入ったときは、小屋の被害が最小になるようお願い下さい。そして下山後、出来る

だけ早く所有者に連絡して下さい。
 山小屋は私有物です。麓の警察で聞
 けば所有者は判ります。）

⑦入山前に登山届を〇〇〇に必ず出して下さい。

() () () () () () () () () ()

⑧ 山岳傷害保険には必ず加入して下さい。

(搜索と救助には、多人数の救助隊員やヘリコプターが出動するため、その費用は非常に高額になります。)

—— 日本山岳会 自然保護委員会（複製歓迎） —— 終わり ——

「山岳総合索引」
の刊行

『山岳』の総合索引が二月末に刊行になりました。予定より遅れて、購読希望の会員の方々にはご迷惑をおかけしました。事項の抽出、検索、照合、校正など、それぞれの過程で実にさまざまな困難や障害が発生して、予想外の長丁場となってしまいました。大変に充実した、斯界に誇れる索引となりました。

『山岳』は、明治三十九年（一九〇六）の創刊で、現在は第八十七号となっていますが、今度の索引は、第一年第一号から第八十五年（一九九〇年）までのすべての事項を収録しています。

『山岳』のような長い年月にわたって継続出版されている刊行物を利用するには、「索引」が不可欠ですが、今度のものは、索引編集の専門家の協力を得て従来刊行されていた二種類のものよりも、さらに本格的な索引として編集されています。特長を略記しますと

一、一九〇六年～一九九〇年までの『山岳』全一四三冊の総合索引。文献・資料目録としての機能も持つ。

二、①山名・地名索引

③事項名索引の三部で構成され、山名件数四二六四・項目六二七九、個人名件数二六九八・項目七八八四、事項名件数八〇三・項目二三二七を収録している。

三、山名・地名は、それぞれの山名から直接検索できるのは当然だが、その

計 報

小野 幸氏 (会員番号一八三八)

本会永年会員小野幸氏は、二月十八日午後九時、十二指腸潰瘍のため、成田市の病院で死去されました。享年八十二歳。葬儀・告別式は、二十日午前十時三十分より、成田市山之作の博全社成田会堂にて行われたが、本会では生花、弔電を献げ弔意を表しました。

氏は昭和十五年八月、吉沢一郎、望月達夫両氏の紹介で入会。戦後お茶の水に、ルームが建設された直後、武田会長のもとで、昭和二十五、二十六年度、図書担当理事として、図書の蒐集・整理に盡力された。

氏は蔵書家としても知られ、また山の絵画にも造詣が深く、このことは「石井鶴三先生のこと」と題して『山岳』六十八年に執筆された記事を見てもわかる。

山に關係するすべての記事が一箇所で検索できる。縦走の記録は、出発と到着の双方の山名から検索できる。

四、個人名・団体名は、同一人物のものはすべて一箇所で検索できる。たとえば「小島烏水」の項目で引けば、小島烏水の書いた記事はもちろん、小島

このように、異色の山岳文化人として知られる一方、石楠花山岳会(昭和十七年六月、奥秩父を主たる

対象として都の交通局職員が中心となつて結成された山岳会)の会長としても活躍され、木暮理太郎元本会会長の記念碑を金峰山麓の金山に設置することについても盡力された。

このことは、氏により『山岳』八十二年に「木暮碑以前」と題して詳しく紹介されている。

晩年は腎臓透析に通院治療しておられたが、本会資料委員会にも協力され、貴重なアドヴァイスをされるなど、最後まで本会のために協力を惜しまなかった。また明治大学炉辺会特別会員でもあった。

喪主は妻貴美子さん。ご自宅は、千葉市花見川区検見川五一二二八―九。菩提寺は成田山新勝寺。

(Y・M)

烏水について書かれたものも一箇所でわかるようになっていく。山名についても同様。

本格的な総合索引の編集方式を導入した今度の索引は、このようにして、他のすべての分野での各種索引にくらべてもヒケをとらないものとなりました。また、この種の総合索引を所有する山岳会は、世界でもおそらく日本山岳会だけであろうと思われます。

会報五五三、五五七号でお知らせしましたように、判型はB5判、上製クロス装、ケース入り、本文9ポ二段横組、四六〇ページで、定価は税込み二万七八一〇円ですが、本会会員特別価格として、一万八〇〇円(送料込み)となっています。お申込みは、日本山岳会事務局。

編集には、本会会員で東洋大学教授(図書館学科)の岩渕泰郎氏をリーダーとする会内外のメンバーがあたり、出版にともなう作業は緑蔭書房の協力を得ました。ここに記して厚く感謝の意を表します。

会員各位の十二分な活用を希望しています。(大森久雄)

女性懇談会より

一九四九年、故村井米子さんを中心に

山岳会東京支部に婦人部ができました。当時は女性会員も少く、ルームにきても女性達の居所、より所がないという状態であったので、女性達の親睦とレベルの向上を目指したと聞いております。

以来、女性隊による海外遠征を実施し、女性会員に「おたより」を出したり、各地で全国集会を開催したり活動をつづけて今日に及んでおりますが、現在は女性会員も全会員の二割を超え、殆んどどの委員会や、クラブにも加わり活動しております。また社会的にも女性の地位や活動の場が広がってきたのと同様に、登山の仲間、地域も多岐にわたっています。

山岳会のなかの女性会員のみの集まりに予算をいただいて理事を選出するというかたちで存在するのは、現在ではそぐわないのではないかと思います。女性達の自由な集まりの場として、移行して続けてゆくほうが、活発な雰囲気や活動できるのではないかと思います。ただ続けてゆけばよいというものでないと、委員会の度に話しあつてまいりました。

一月の房州富山麓とみさんの新年会に集まった会員の方達からもいろいろな意見が出ましたので一部報告いたします。

○新しい会員は山岳会にどのような女性が集まりに出ることによってきつ

けを得たい。

○女性に呼びかけをしてきた今までの歴史をまったく消してしまおうということではない。永い年月と時代の推移により委員の中では態勢を考え直すべきという声が盛上っている。

○若い時代から活躍した人達の集会はある程度時代を経てくると新しい人達には踏み込めない面もあるように思う。それが次第に一部の人達の女性懇談会ということになりかねない。

○他の委員会(男性)の中では女性を

収容する会として求められているむきもある。

○よりよい活動の場として多くの若い層を呼び寄せるためにも今の女性懇談会の態勢を見直し、多彩で個性的な山行を企画、実行出来る山岳会のクラブにしたい。

以上のようなことで女性懇談会は、山岳会組織の委員会からはずれることを提唱しましたので、女性会員の皆様のご理解を希望いたします。

(穴田雪江)



すべての会員に

考えてもらいたいこと(2)

羽賀克巳

翻ってわが国の各種開発計画と日本山岳会の歴史を見ると、自然破壊に伴う計画に対しては、他の自然保護団体や文化団体と連携して明確な態度を示し、具体的な行動を起こしている。第

二次大戦後の主なものを列挙すれば、「尾瀬ヶ原、黒部川、熊野川水系等々

の電源開発計画」「大台ヶ原有料道路と森林伐採計画」「屋久島森林伐採計画」「大雪山縦貫道路計画」「西穂高ロープウェイ計画」「連峰スカイライン計画」等々がある。これらはいずれも、戦災復興、高度経済成長、列島改造等々の国を挙げての政策スローガンのもとで展開されたものである。

さらに遡れば、明治・大正時代に始まる「尾瀬沼発電計画」や昭和十年の「富士山ケーブル計画」、大戦中においても、「尾瀬や黒部の発電計画」「富士山原始林の伐採」などに対して、ある場合には個人的な論文の形をとりながらも、時局に抗して自然保護の姿勢を明確にしている。

ここでとくに取りあげたいのは、昭和三十七年全国支部長会議における松

方三郎会長の挨拶である。松方会長はその中で自然保護に言及し、大要「ド

ライブ・ウェイを造って、その結果、人間の歩く道は姿を消してしまったところも多い。山と見ればケーブルをつけないければ気がすまないという危険な人物も、あい変らず天下に満ちている。

中略「黙っていると、とんでもないことになっている、といった事実はわれわれの目の前に余りに多い。ヒマラヤ遠征大いに賛成だが、自分の国の山を目茶苦茶にしておいて何のヒマラヤだということなのだ。われわれは日本人だし、われわれの会は日本の山岳会なのだから、何としても日本の山をちゃんとした山にしておかねばなるまい。日本山岳会の土台はやはりこうしたことに対する明確な考え方の上に、しっかりと根をおいていなければ「後略」と日本山岳会が基底に据えておくべき視座を明確に述べておられる。

昭和三十七年という年は、高度成長政策に伴うレジャーブームやモータリゼーションの始期に当たる。多くの国民が所得倍増計画の夢に酔わされているこの時に、やがてもたらされる乱開発や公害発生を予見し、日本山岳会の基底とすべき視座を明確にして社会に警鐘を鳴らされた松方会長の卓見は、現今の世相に照らしてみると、すべての会員が深い反省を込めて想起し、

強く肝に銘ずべき視点と言わねばなるまい。

これまでに述べた一連の戦後政策は、わが国の登山界にも大きな影響を及ぼした。これには、善かれ悪しかれ日本山岳会の果たした役割も大きい。経済発展と交通手段の発達、底辺を拡大して登山人口を飛躍的に増加させ、海外遠征さえ極く日常的なものに変えた。反面、登山を競技場でのスポーツと同一視するような風潮も生まれ、登山者のモラル低下が指摘されるようになった。また、登山に伴う自然破壊が目を見わたるようになるほどになり、それは、国内にとどまらず、海外においてさえ批判の声を聞くまでに至っている。

ところで、これまでに展開された開発は、時に複合的な性格を帯びつつも、事業主体の官・民それぞれ明確に判別できた。だが、現在のリゾート計画の多くは第三セクターという半官的な包装で正体をばかし、しかも、自然との触れ合いという看板によって、半ば強制的に自然から隔離された都市住民を惹きつけ、地域振興の幻想をふりまいて過疎に悩む地域の人々を巻き込んでいく。それだけに、過去に執られたどの政策よりも危険でやっかいな政策と認識しなければならぬ。

このように、登山という行為そのものから発生している問題と、わが国の

優れた自然が壊滅の危機に瀕しているという現実を直面しているからこそ、いま改めて、会員の一人一人が自然保護を真剣に考え、「日本山岳会における自然保護の基本理念」を明らかにし、社会の先導役を果たす必要があると考える。

たぐいなく美しいわが国の自然を讃え、その自然を愛護することを「夫れ高山に登るは、即ち天に近づくなり、……自然が刷ける色彩、自然が放てる光沢の純粹なるものは、最も山に饒多にして、自然が意匠し、彫刻せる形体劃線、又山を以て最も変化万千と成す、故に山角に立つは、絶対の一端に佇みて、絶対の秘奥を覗ふが如し」と格調高く掲げて日本山岳会を設立した発起人諸賢、その遺志を立派に引き継いでこられた諸先輩の功績を誤りなく後輩たちに伝えるためにも……。――終り――

日本山岳会土曜会と

婦人部の思い出

坂倉登喜子

日本山岳会に昭和二十二年に入会して、お茶の水の山岳会ルームに始めて行った時、日本山岳会の二階が土曜会の部屋で、垂直の梯子を登ると机と椅子があつて、こじんまりした部屋だった。

当時一階は広い図書室で、人数が多い時は下の部屋で、当時の有名登山家の大先輩の方々が沢山集まって、クラブライフというか山のサロンの雰囲気毎週会長他役員や名誉会員の皆様がいかに楽しそうに歓談されていた。私は最初恥かしい思いで恐る恐る遠慮がちに飛びこんだのがこの土曜会だった。

その頃バーテン役の故神谷恭さんが浅草にあったデンキブランの神谷バーの名前をつけて、ニッカウイスキーの一杯を計って皆さんに配るとそれを水割して楽しそうに飲みながら山の話やよもやま話に花を咲かせておられた。

女性会員は時折故村井米子さんや、今井喜美子さん等が見える位で、大抵私一人だけで土曜会メンバーとして、神谷恭さんがいつもこやかに迎えて下さったので、最初に飛びこんだ土曜会が、私にとってとても嬉しく思われて、勤務時間が終ると毎週土曜日が楽しくなつて、日本山岳会へ通った。

当時は横有恒、松方三郎、日高信六郎、藤島敏男、足立源一郎、入会紹介者の入沢文明、山下一夫諸氏等の常連の皆さん十名以上の方々が集まって賑やかな土曜会であった。私は先輩の皆さんから精神面の人格的な教養を受け、上高地のウエストン祭や六義園の集まりでお話を聞いたり、山にお供し

たりして恵まれたお茶の水時代を過ごすことができた。そんな盛会だった土曜会が、今では諸先輩はほとんど亡くなり、霧の旅会で最後まできておられた松本さんや山崎さん達の常連も今は亡く、現在は慶応OBの河野先生兄弟と内藤氏が毎土曜日灯を消さないように出席して下さっている。私はお茶の水時代からの生残りの一人で今も女性

は一人切りで、土曜日山へ行かない時は、地酒の旅で求めた日本酒を持って、昔の土曜会華やかなりし頃を思い出しながら、これからの土曜会の計画などを話し合っている。去年は土曜会の忘年会を、今年はサッポロビール見学会を入澤氏の協力で催した。山岳会の中

高年会員の皆様には非ルームへ足を向けて、クラブライフを味わって欲しいものと、いつも話し合っている次第である。

私は入会と同時に東京支部の仕事に携わり、昭和二十四年に婦人部を創立して、女性としての活動を始めた。

幸い大学OBの方々が婦人部のリーダー役を下さり、技術講習会、登山家の講演会、国体登山部門女子役員、職場山岳会と学校山岳部との交流座談会、諸先輩との山行などを計画して、女性会員の登山の向上と、女性としての分野で活発な活動を続け、三ヶ峠岩登り講習会、冬富士国体登山や、学校

山岳部員との山行や、山岳連盟婦人部との交流も計って、会員のために協力した。

日本山岳会の婦人会員には遠征するために会員になった女性も多く、かなりのレベルをもった会員が各方面に遠征していました。

しかし、私は私なりに初心者の方の指導の重要性和、女性らしい長続きする登り方を目的の女性だけの下部組織を作ろうと考え、婦人部は後輩に任せて、昭和三十年から独自のエーデルワイス・クラブを創立し、団体加入して現在に至った。

JAC婦人部は昭和二十四年に発足したので、既に四十四年の歴史がありその会員数も増え、いつか名称も婦懇から女性懇談会に変わったが、私は対外的にも元の婦人部の名が良いと思う。

昔は土曜会が主体で婦人部が協力して、ビールパーティや忘年パーティを神谷氏と私が企画したのが最初で、白樺の木のある庭でいつも催していた。

今は集委員会と婦懇の共催で続いているが、女性の仕事はこれだけではなく、会のため奉仕の明暮が続いた。

明治五年女人禁制が解かれ男女平等に登れるようになったにしても、男性と競い合うことなく、他のスポーツと同じように女性の限界で安全登山を目標に中高年女性の基礎指導こそ、私達

の仕事ではあるまいかと思うのである。

山と自然の断章(1)

岡村治信

山に惹かれる

山に強く惹かれる人ほど、自然のもつきびしさ、山のもつ恐ろしさをよく知っている。そのきびしさ、恐ろしさを知ればこそ、その底に流れる自然の冷静なまた厳正な性格に魅力を感じるのである。

山に入るものにとっては、複雑な地形や急激な気象の変化や、動植物による思いがけない害さへも、すべて自然のもつきびしさである。これにどう対処するかを知る者だけが自然の門に入ることを許される。十分な装備も健康も、強い意志も正しい判断力もそのた

めに必要である。これなくして大きな縦走に挑む例をししばしば見るが、いかに自然に魅せられたからといっても、自分を見失っているのであって、その山行はやはり無謀であり無意味といふべきだろう。

ともあれ人は山と自然をよく知れば知るほど己れの力の限界を知り、その登山はより安全になりより深くなるのである。

なぜ山に登る

人はなぜ山に登るのか。この問いは答を求めない。マロリーは、山がそこにあるからだ、と答えたといわれるが、登りたいから登るのだ、と言ってもよい。山の中にいたいから、と答えてもよいし、そんなことを問うのは愚かしいことだ、と笑ってすますのもよい。

しかし人が山に登ることには大きな理由がある。むしろ人間の限りある言葉では現わせないほどの深い理由があ

ナムチャバルワ登山隊

日本スポーツ賞優秀団体に

一九九二年で最も活躍したスポーツ選手、団体を表彰する第四十二回日本スポーツ賞(読売新聞社制定)のグランプリには、バルセロナオリ

ンピック競泳で金メダリストとなった岩崎恭子さんが決まり、一月二十九日読売新聞社において授賞式が行われたが、ナムチャバルワ登山隊山田総隊長以下十一名も優秀団体として表彰されることになり、当日山田総隊長、重廣登山隊長等が授賞式に出席した。

るからこそ、完全な答えができないのだし、答える必要もないのだ。にもかかわらず私はその答えを何とかして目の前に並べてみたいと希っている。私の合理的な考え方のせいである。私は、時にはそんなことにこだわっている自分がいやになることがある。しかし別の時には、山に登る理由を自分なりに納得するまで深く追究して文字にすることは、登山者、いやむしろ人間としての義務であると強く思うこともある。

敬虔なる山

登山者が登頂を果たしたときに、その山を「征服した」と言って喜ぶことが多い。肉体的精神的な困難に打ち克って頂上に立った満足感・充実感から「征服した」という表現をとる心理も理解できなくはない。

しかし山は征服すべきものではなく、順応し敬仰すべきものである。山は闘争の相手ではなく理解し、融和し、味得すべき対象である。登山は単なる身体的運動ではなく、むしろ冥想・思索によって自己を凝視する活動である。

真の登山者は登頂のみを目的としたり、ことさらに冒険をして山と闘ったり、あるいは体力や気力を他人に誇ることをしない。スイスの著名な登山家ホルンテンラーも、その著書の中で次のように言っている。

「山に登る者は、みな自己の力を誇示せんとするのであるか、否、彼らのうち最も力のあるものこそ、却って登山によって静かなる幸福をのみ希うものである」

カラコルム行

伊佐九三四郎

〈カラクリ湖・クンジェラプ峠〉

黒き湖カラクリ湖畔に魚影なし大魚伝説聞きし月の夜

西の果てタシクルガンの夜の街舞会つづくか楽隊の音

三蔵の越えたる峠に吾も立つ仏求むる心なけれど

〈フンザ〉

大いなる岩の屏風をひろげたるフンザの里は緑濃くして

その昔藩主の住みし古城ありデイラン、ラカボシ指呼の間にみて

日本の名クライマー逝けるフンザ谷ウルタルII峰に夕陽悲しく

シャングリラ、カリマバードの夕暮れは白きラカボシ茜色に染む

杏咲くフンザの里は恋しかりリングたわねに実り香れど

白き峰たおやかにありデイラン峰丘の上なる夕暮れの時

〈ラツシュファールピーク〉

天幕に雨音聞きつ一人をり還暦記念の
登頂前夜に

停滞の身のおきどころなき天幕にまど
ろむ一夜山頂の夢

山上の小さき湖ラツシユファアリ、
エーデルワイスに雪の舞ひくる

ラツシユファアリ頂に立てり還暦の記
念のしるし一つ積む石

ナガールの谷の奥なる峰めざす黒き氷
河に白き雨降る

佳き旅の旅の終りにふりかへるラツ
シユファアリの黒き針峰

〈インダス河〉
断崖にはりつきてたつく村々を古糸の
ごとたどる仙道

めくるめくフンザの流れ断崖に沿ひて
たどれる古き絹道

うずまきて流れる川はK2の氷河くぐ
れる荒くれの水

大岩を運べる氷河の水の色表はしがた
き荒きいろどり

人間のあらがいの歴史映しつ濁りて
流る悠久の水

暮れなずむインダスの流れとうとうと
大断崖に村の灯乏しく

英彦山、福岡支部大会他

小林碧郎

鉾杉や磴崩えのこる霧時雨

冷まじや千本杉の風禍あと
粧ひて英彦山権現雲に立つ

九重山

草紅葉して競ひ立つ熔岩の峰

宮崎ウエストン祭

秋高き祖母山仰ぐ祭かな

(一九九二・十・三十〜十一・三)

八方尾根懇親スキー行

西山秀夫

スキー宿尻取ゲーム始まり

赤ジャケツ白で編み込む頭文字

無線機でスキー仲間連絡す

ケルンかなし吹雪の尾根を迷ひけむ

湿雪や拙きスキーの回転弧

吉村健児氏はアフリカの山から帰国すぐの参
加

アフリカの雪焼顔で話されり

(二・一五〜一七)

ウエストンの隣りに

岡野金次郎

田畑真一

安川茂雄の『近代日本登山史』(昭和
四十四年六月発行)の口絵写真には、

ウエストン夫妻を囲む宴席の一葉があ
る。本書「月報」のなかで、安川はこ

画文集II むせる若葉

小林政統 画と文

●A4判116頁 9,800円 最新刊ノ
オールカラー 特装函入 特選紙使用

美しい日本の自然を追って春秋の山をかけ
巡り、30年に亘って描きしたためた山の花

の世界。淡彩画によるシリーズ第二巻は、
信州の山の花を中心に全国の名花を収録。

キバナアツモリソウ、レブンアツモリソ
ウ、ユウバリコザクラ、キタダケソウなど。

■小林政統「山の花」全国縦断展
東京・丸善日本橋店4F
4月19日(月)〜24日(土)

岡山市・丸善岡山シンホニビル店B1
5月5日(水)〜10日(月)

名古屋・丸善名古屋店4F
5月27日(木)〜6月1日(火)

札幌市・丸善札幌センタービル4F
6月22日(火)〜27日(日)

山宿スケッチ帖

岡部一彦 画と文 ●2,000円(カラー)
四季おりおりにとっておきの山宿に泊ま
り山麓や草花・蝶をスケッチした画文集

静かな山12か月

石井光道 著 ●1,950円
東北から中部山岳まで静かで味のある山
78座の旅紀行。イラスト地図・写真付。

季刊 山の本

創刊第3号 ●1400円 好評発売中!

特集=森を歩く
座談会=今だから話せる山の失敗談
高田宏:ふるさとの森
田島征三:おいしい森をふみつぶすな
堀淳一:ピンネシリとパンケ山
熊谷樵:巻機山 地獄の山スキー
本多勝一:剣山
その他、随想、コラム、紀行ガイド、本の紹
介、データバンクなど
■第4号は6月中旬発売



イラスト=沢野ひとし



アカネスミレ
「水ぬるむ」より

【好評既刊】
画文集I 水ぬるむ
小林政統 画と文
●A4判カラー 9,800円
第一巻は23種のスミレを中
心にエンレイソウ、サクラ
ソウ、カタクリなど早春の
芽吹きの花々。

白山書房 〒153 東京都目黒区駒場4-7-8
TEL:03(3485)1309 FAX:03(3466)3964

●価格は税込

の写真について次のように紹介している。

「故中村清太郎先生の遺品中より発見され、長男浩太郎氏より貸与されたものです。同時に若き日の鳥水、加賀、高野、三枝、中村といった方々の肖像も拝見したので、この列席者の顔ぶれと照応し大半は判明したのですが、わからないものもありました。そこで列席者中ただ一人の現存者であられる三枝先生（田畑注、三枝威之介）に写真同封のうえ照会ねがったところ、古い記憶のなかで日時、場所、目的といったものは曖昧で、ただ各人のご指名を得たしだいです。（田畑注、中略）ところが三枝先生のご指摘で、はっきりしないけれどもおそらく岡野金次郎翁であろうとの回答を得ました。（田畑注、中略）このほか考えられることは、この席に明治末期渡英中の武田久吉博士が欠席していること、それに岡野翁はおそらく撮影者だったと想像されま

すなど思いあたるのです」
私はまずは安川の当を得た照応について敬服するものである。前記以外にも、辻本満丸、辻村伊助、梅沢親光についての照応があり、言うならば近代登山初期の山岳人の揃い踏みのようなものである。

ところで私はこのたび、この写真と岡野の令孫・小永井暹氏（平塚市）並

びに岡野修氏（本会々員）のご助力を得て、岡野のご長女・小永井ユキ様明治三十五年生まれ）に見て頂く好機に恵まれた。その結果、安川が「岡野では」と照応した人物は、やはり岡野であった。したがって安川が紹介した「岡野翁はおそらく撮影者だったと想像されます」などの推察は消失する。ただ、三枝威之助も故人となり、写真中の人物全員が先人となった現在、安川が残したこの月報の資料的意義は、まことに大きいと言わざるを得ない。

〈別記〉

先人のお名前については敬称を省かせて頂きました。小永井暹氏宅（前記）訪問のさい、同行頂き、ご配慮を得た三井嘉雄氏（本会々員）に対し、謝意を表します。

一寸昔話

増本 茂

今日は一寸昔話にふれてみよう。

昭和二年信州中房の温泉を三時におきて合戦坂から右手に燕岳、左手に大天井岳を見上げると、槍が夕陽に輝いている。行くかと三人は立上った。三人とは住銀の後に常務となったN君、も一人は大阪高麗橋のそばにあったカマボコ屋の長男そして私は損保界の一人

である。案内役は上條孫人さんで、途中道はたの雪をコッフェルに入れて温水にし紅茶を入れて飲んだものである。夜八時頃小屋につきすでに一同の山岳人は寝ていた。人に聞けば上條孫人さんは小屋の主人との事である。

テントをかついでの登山で仲々苦勞したものである。槍の雪渓を下る時、不覚にも杖を手離して仕舞った私は、杖を追かけて大声を上げて走った。杖の先に金属がついていたので、雪渓を下る人に大変なけがをするのを恐れたのである。杖は岩石にぶち上って空に舞い真直ぐ氷原に突きささった。それからは棒状を使用するのを中止して今以て大切に保存している。

小梨平でテントを張り夜の寒かった事を覚えている。当時五千尺旅館で一升の米を買った時三十銭であった。あれから上高地へは数度行っているが、関西人の小生には仲々自由時間がとれなかった。奈川渡の小屋には熊の子が三匹くられ可愛かった事を覚えている。現在八十六歳の小生、二人の山男もすでになく、残念である。焼岳の谷に落ちた岳人探しにも参加した。

このような文を書せたのも「新緑にはえる徳本峠」の坂倉登喜子さんの名文のためである。坂倉さんには会った事もなく、全然知らないが知名人である。エンレイ草の咲いた温泉には牛の

背をかりて物資を運んでいた頃の話である。パイ缶のカラ缶にエンレイ草を入れて持帰った。乗鞍岳への案内をたのんだが、熊狩りをするとの事で断わられた温泉で、クマの肉を一皿五十銭で買ったものである。白骨温泉も随分発達してテニスコートが出来上った。

感激深い。徳本峠には娘さんがいて、マンジュウのうまかった事を思出させた。坂倉さんの名文に感謝しています。日本橋丸善の隣の損保会社にいた私にはヒマなんか全然なく、新潟をたつ時本や資料は大学へ寄付してきた、今は親会社へ寄贈しているが、誰が読んでいるかどうか。

白骨から乗鞍岳へ登る時、大樹に大きな穴があったものが沢山あっていまでも熊が出るかビクビクしながら登ったものである。

ここらで関西の山「女ののぼれない山」の事にふれてみよう。大峰山である。数年前に外人女性登山家が追いかえされたという記事を読みました。奈良県の下市でバスを降り、山へ登るのである。途中鉄クサリをつかんで登ったものである。夕食の時、山番が来て肉は食べられぬと言われた。明治屋でえらんだのに残念であった。行者は白い衣をきて上り、聖域につけば古いものをぬいで谷間の木に投げたものである。行場の岩がまた大変で、右足から

岩にかからないと岩をのぼる事が出来ない所があった。苦勞してのぼったものである。「蟻の戸渡り」という岩があつて左側は何百尺と知れぬ。片足でせまい所を歩くので右側の岩に手をふれると、岩がゴトンゴトンと動くのである。また行者のやる事を見ると、深い谷をのぞきながら「親孝行するか」「先祖をたつとぶか」と行者がどなっている。吾々も腰のバックルがガリガリという所まで身体をつき出されてヒヤヒヤとした思いが一杯であつた。あれから吉野ザオウドウまで「百町の山道」を下る時のつかれる事であつた。

報告

第二回中高年登山対策全国大会(上)

山行前にメデイカルチェックを

「第二回中高年登山対策全国大会」が二月二十七日、東京・水道橋の東京グリーンホテル水道橋で開かれた。

今回の大会は、前回の総論から論議の焦点を絞り、より具体的な事例などをあげて討議し、日本山岳会支部の山行などに限定せず、岳連企画の山行、市民登山やカルチャーセンターの登山教室などである、中高年登山者の孕んでいる諸問題を話し合い、その指針を探るべく、S・S・F・スポーツエイ

吉野はヨシノクズの名品が沢山ならんでいて。今では吉野ケープルが出来て安心して登ることが出来る。桜の名所、歴史の名所、是非行かれる事を切望してやまない。ライターもなく、ローソクとマッチを所々に入れて分散、あれやこれやで思いがつかない。この辺で筆をおく事にする。上條孫人さん、坂倉さんの健康を切望する。

七月、八月は入院して旧病(心筋梗塞)の検査もくまなく検査して貰いました。旧に変わらぬとの事で一安心しました。つかれましたので失礼します。乱筆をおわびします。

ドの助成を受け開かれたもので、正副会長以下各委員会担当理事、二十二支部および三水会の事務局担当者、山行企画実行者ら約七十名が出席した。

大会は中川武支部担当総務委員が司会を務め、小倉茂輝総務担当常務理事が「昨年の第一回大会は熱の入った討論がなされたが、主催者側の準備不足もあって、問題の核心に触れるところまでいかなかった。今回は事例をもとに十二分に討論を進めて欲しい」と開



会場風景

会の辞を述べ、次いで挨拶に立った山田二郎会長は「昨年は五里霧中だったが今回は焦点がでるのではないか。日本山岳会の平均年齢は五十四歳に達しており、あたかも日本中高年山岳会の感がある。この問題に正面から取り組むために、私自身のビジョンは持っていない。皆さんのご意見を聞き私も勉強したい。回を重ねるごとに具体的なものが身につくのではないか」と述べた。

続いて次の三氏から大要次のような講演がなされた。

●岡崎助一 文部省体育局生涯スポーツ課長補佐

政府としても、豊かな生活大国の実

現を目指しており、文部省としても、国民一人ひとりが運動、スポーツに親しんでもらえる生涯スポーツ社会の実現に向け、その環境づくりを急いでいる。文部省調査でも、四人に一人は何んらかの運動をやっており、ハイキング・登山については一六・三%が実施、二五・九%の人が今後やりたいと答えている。総理府調査でも、登山に限ってみると、八・一%の人がやりたいとしている。

二〇〇〇年を目前にして、高齢者人口はますます増えていく。高齢者の生がい対策として、文部省も生涯スポーツ推進事業を展開、スポーツの種類を固定せず、都道府県、あるいは市町村を通じて補助事業も行い、週一回、三人に二人は何らかの運動をやっている社会の実現を目標としている。これは提言だが、登山愛好者を如何に増やしてもらうか。それぞれのスポーツ団体、愛好者を抱えている組織の基盤整備とともに、日本山岳会独自で登山愛好者の増大を図ってもらいたい。また青少年を中心とした登山クラブを各地で育成してもらいたい。そのためには指導者の養成・確保が重要となってくる。これからは各個人のニーズ、能力を高め、また持っている資質を如何に伸ばしてくれる指導者が必要になってくる。

安全に対する意識の高揚も必要で、文部省としても中高年の安全登山の手引きを刊行したが、今後とも事故防止の啓蒙に努める。

●大森薫雄神奈川県立厚木病院副院長
中高年登山者は自己の力量を知り、仲間とともに生涯スポーツとして考えるべきだ。体力は年齢とともに衰えていく。とくに下肢の衰えが顕著。このため体力と気力のバランスがくずれ、瞬発的動作が遅れる。疲労が早く出てなかなか回復しない。はたして自分が登山をやっているかどうかの、メデイカルチェックが必要になる。中高年登山者の健康管理はまさにメデイカルチェックに始まるという。そのメデイカルチェックだが、一般的には糖尿病、腎疾患、肝疾患、高尿酸血症、貧血、胸部レントゲン、心電図などの一般検査だが、特殊メデイカルチェックとなると二十四時間心電図、運動負荷試験も必要だ。登山活動によって発生する障害や、潜在性の健康阻害因子をチェックすることである。日頃、自己健康管理のため①熱はないか②体はだるくないか③昨夜の睡眠は十分とれたか④食欲はあるか⑤下痢をしていないか⑥頭痛や胸痛はないか⑦関節の痛みはないか⑧過労はないか⑨前回のスポーツの疲れは残っていないか⑩今日のスポーツに参加する意

〔自然保護随想〕

猿焼き山のゴミ

十一月中旬の日曜日、道志・猿焼き山に登った。高曇りながら遠望がきき、盛りの紅葉を分けながら歩く。山頂で昼食中、顔見知りの三人が登ってこられた。三日後の水曜日、カルチャースクールの生徒達を連れて、少し短いルートから再訪した。山頂に登りついてびっくり、空きカン、スチロール皿、おにぎりを包んだらしいアルミ箔が散乱していたから。座って休むのに丁度良い場所のまわりに、それぞれ置き去りにされている。三日前、私が座った場所にもある。前を歩いていた三人で拾い集めたら、スーパーの袋半分余になった。最後尾が登りついた時は、ゴミのない山頂に戻っていた。

猿焼き山とは、二万五千分の一「都留」の中央右、猿焼き沢の頭、八八〇メートルのピークである。西隣りの△八七八・三「城が丸」と双耳峰形をしている。朝日川から

欲は十分にあるか、のセルフチェックは十分にしているか、常に体調を整えるようにして欲しい。

中高年者に適したトレーニングとしては早歩きをすすめる。そして関節を十分に伸ばす。足腰の筋肉を十分伸ばしたところで十分位止める。このことだけで筋肉の衰えを防止する以外、心肺機能を高め、血圧を下げ、糖尿病を予防し、脳の働きを活発にする。早歩

登る峠道までの名残りらしい破線路が数本だけ、尾根上には破線路も入らず、物好きだけが歩く山域であらう。さて私は、山頂にゴミが落ちていれば、必ず拾うか？ NOである。歩く人の少ない古い峠道や、不遇な山のゴミは拾ってしまうが、団体主催のゴミ拾い山行などには参加する気になれない。

山に登ること、どんな山に登るか、そしてゴミが気になって拾うか、どれも、個人的な趣味の領域だと思われる。

私自身は、踏み跡程度の藪山で、果物の小さな皮や種ぐらいいは捨てたことはある。また、生理的落し物や落し紙も山に残してきた。ゴミ拾い山行をしなければならぬほど悪いことをしてないつもりなので号令を掛けられて拾うのが嫌なのだ。

登山者が山に踏み込むだけで、山を壊わし、生態系を狂わしているそうである。被害を最少限にとどめ、山に入らせて貰う。そんな山歩きを続けたいと思っている。

(山口悠紀子)

きは脈搏一〇〇〜一四〇が中高年に適したメドで、これを一日一時間、週三回やると前述の効果がでてくる。

●小倉童子朝日カルチュアセンター「女性のための山歩き教室」元講師
仲間がいなかったら助け合えない。だから単独行はしない。楽しい山登りは事故をおこさないこと、これが基本。いい仲間を持つことが大切だ。私の教室での経験からいうと、初心

者は誰かに連れて行ってもらいたいのが本音。これではいつまでも初心者で、人を連れて行くようには育たない。私は皆がリーダーとして自覚を持てる方針で講座を進めた。リーダーとしての自覚が出ると、気象、メンバー、あらゆる面に目がとどくようになる。初心者にとっては、良き指導者にめぐり合うことが重要なポイントとなる。指導者も、自己を高めながら指導すること

が必要だ。

問題は市町村や旅行社の企画するツアーだ。例えばバス一台に四十五人、添乗員だかりドライバーだか一人というのがあがる、単に人を集めて行けばいいという性質のものではなく、主催者の無責任さが問われると思う。これからはこれらのチェックも必要だし、今後指導して行く上で問題となろう。

それとマスメディアにも問題がある。そこには美しい山の写真があり、反面都会からそのまま抜け出したと思われる点景人物がいる。誰もが安易に行けると錯覚する。これらのことも考えなければならぬのではないか。

とくに中高年初心者の登山は、無知、無理、過信に落ち着くが、この意識を如何に払拭させる指導が肝要だ。

― 続く ― (高田眞哉)

南極旅行

アンタクトティック

ウォーク南極点探検隊

副隊長 松原尚之

ソリを曳いての急な登りに苦しんだ末、私たちはようやく峠の上に達す。歩き始めて三日目、これでエルズワース山脈とも別れた。峠の向こうに広がっている風景は、地平線の端まで真っ平らに続く茫漠たる雪野原だけ。



南極点記念ボールにて (1993.1.17)

ここからは南極点まで、まったく変化のないこの単調な雪原を、ただひたすら私たちは歩いていく。

朝十時に歩き始め、夜八時まで一日十時間歩く。それで二〇キロくらい進む。気温はきわめて一定していて大体零下一五〜二〇度くらい。風が弱ければ、これくらいの気温は決して厳しいものではない。そして強い風というのは実際めったに吹かぬ。雪面のサスツルギ(シユカブラ)は大きなもので二層近くもありソリを曳いての歩行を厄介なものにするが、大きな登りや下りや、私たちが危険にさらすようなクレバス等の障害は皆無である。どこまで行っても真っ平らな白い沙漠には、少しの

風景の変化も現れない。白夜の南極に夜はなく、空を見上げても雲がかかることさえ珍しい。

環境に関する調査が隊の第一義の目的だ。しかし、それを除いたら私たちの生活は、ただ起きて、歩いて、食べて、寝る。ひたすらその繰り返し。変化のない世界で、変化のまったくない生活を繰り返す。

一人当たり約一四〇キロのソリを曳いて一日十時間歩くのは、決して楽な行動ではない。純粹に肉体的に見れば、大抵の登山を凌駕していると言っている。出発を前にした朝のテントの中ではいつも必ず少し憂鬱な気分だ。しかし、ひとたび歩きだせば大抵の場合、私の意識は私の肉体から遊離する。空想が始まるのだ。

危険や劇的風景の変化のない単調世界だからこそ、またそこでひたすら足を前に出し続けているからこそ、意識の中の空想世界は果てしない広がりを持つ。しかも私たちは、俗世間から完全に隔絶された生活を長く続けている。そこでは空想は自ずと自己の内へと向かい、未来の自分の生活の具体的な組立てがその中で始まるのだ。

その十時間の歩行を終えた時、私たちは一瞬にして現実に戻り、再び南極大陸の雪原の上にいる。実際に南極を歩く旅と、自己の意識の内をめぐる

旅と、二つの旅を同時に私は行なっている。

六十七日間、一一〇〇キロの道程を歩き通して南極点に着いた時、そこには「幸福」とさえ呼べるほどの大きな喜びと感動、解放感があった。南極点を目指す徒歩旅行の、そこが終着点であり、また自身の未来への旅の、新たなスタート地点でもある。

次はどこへ行くの？ とよく尋ねられる。

次の私の目的地は、北極点でもヒマラヤでもない。私の次なる旅は、あの空想の世界で旅した私の素晴らしい未来を、今度は現実の世界に逆転させ、実際に一歩一歩歩いていくことである。

・ ・ ・ ・ ・

ともあれ、日本山岳会の諸先輩方の温かく、親身なご支援のおかげで、私たちはこの素晴らしい体験をすることができました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

「道志二十六夜山」

忘年山行に参加して

岩手支部 諏訪 弘

十二月十三日朝、道坂トンネル手前でバスを下車、高澤集会委員の挨拶で

登山が開始された。道志二十六夜山(一九七七)は、秋山二十六夜山(九七一)とともに登ってみたい山のひとつであった。

故今西錦司氏と前岩手支部長故佐藤敏彦氏が、北上山地の白見山に登り、二十六夜様信仰の碑を発見しかねて下山したことを『かぬか平の山々』日本山岳会岩手支部編で読んだ。それ以来月待信仰について興味をもち、二十六夜山についてこだわり続けてきた。

今朝は晴天で気温も低く快い出足である。道坂峠から雑木林に入り、落ち葉と霜柱を踏みつけながら一気に御正体山縦走分岐に登り詰める。眼前に山並が開け、ドーム型に仰ぐ山は今倉山(一四七〇・三)である。目指す二十六夜山は、この今倉山から西に走る尾根続きの一番西に位置し、ピラミダルな山容を見せる山である。さらに西方にはアンテナの林立する三ッ峠が望まれる。小休止をとるたびに旧知の仲間のようにうちとけて話しがはずむ。

一步、一步高度を上げることには後を振り返ると御正体山が大きく迫ってくる。その後には雪を頂いた霊峰富士

山研募金に協力しましょう！

山がニョキニョキと顔を出してくる。一步の高さによる視界の広がる素晴らしさは格別である。「あつ富士山だ」と、歓声が上がる。山は穏かで天候も落ちついていて。それでもいつの間にか富士山頂には笠雲が覆いかぶさってきた。風立の兆である。今倉山頂からミズナラ、ブナ、クヌギの林を縫いながら幾つかのピークを越え松山展望台で昼食をとる。

それ程の疲れもなく元気である。風が出てきて体温をうばう。二十六夜山まではこれより下り一方だ。時折り猪狩りのハンターと出会う。単独行の山ではない。集団で陽気にウァウァ騒いで歩く山である。狩猟期の山行は危険を伴う。風が冬枯の梢を鳴して吹き渡る。落ち葉が強風に煽られて腰まで舞い上る。いよいよ強風のお出ましである。突風が谷から尾根へと吹き踊る。緊張の瞬間である。木の葉が風でスパイラルされてものすごい音を立てて風道を流れ飛んで行く。初冬の山の美しさと厳しさが交錯していく。突風のリズムに合せながら尾根を歩く。富士山は雲に隠れて姿は見えない。やっこの思いで二十六夜山に立つことができた。

山頂は広くないがよく刈払われており寛げるようになってる。立派な三等三角点の標石がある。西へ二十分程

下った場所に二十六夜塔の碑が建立されている。御正体山にかかる月を待つ昔の人々の素朴な民間信仰の面影を偲びながら一礼する。

強風に煽られるJACの旗を必死に抑えながら記念写真を撮る。一同至極ご満悦の顔であった。木の葉なだれに気をつけながら一気に下山。お世話してくれた役員に感謝し、山行の成功を祝して乾杯した。(参加者二十八名)

「土曜会」の初の会外遠征

サッポロビール

千葉工場見学会

集会 入澤郁夫

「土曜会」、もう四十年以上も前から連綿として続いている飲ん兵衛の会である。恐らく日本山岳会の中にあつては最古の歴史をもつ同好会であろう。発足の事情等を詳しく知っている訳ではないが、何でも終戦後の飲みたくても飲めない時代で、まともではなかなかお酒の顔も拝めなかった時代に、飲みたくて悶々としている仲間を見兼ねて当時の日本果汁(株)(現在のニッカウイスキー)のオーナーだった加賀正太郎さん(会員番号一五一番、故人)が気の毒がってニッカウイスキーを廻して下さったのが始まりだそうである。そしてその貴重なウイスキーを毎日飲ん

だのではすぐ無くなるからと、毎週土曜日の午後三時から八時迄をバー開設の時間として楽しみ出したのが出発点のようです。当時のルームはお茶の水の岸体育館の一角に建っていた山小舎風の建物でしたが、その屋根裏のような二階の室がバー開設の場所でした。下の図書室で本を読んでいると、呼ばれて時々お相伴に預ることがありましたが、常連でよく顔を見せておられたのは、藤島敏男、横有恒、三田幸夫、日高信六郎、足立源一郎、中村清太郎、佐藤久一朗、神谷恭さん等の何れもお酒には目の無い方々だったのを想い出します。そして当時の値段は最初の一杯(W)が五〇円、二杯目からは四〇円だったと記憶しています。その一〇円の差は何でもおつまみ代なのだそうです。現在の土曜会ではウイスキーの(W)を二〇〇円取っているようなので、四十年経過した現在でも最も値上り率の少ないものと言えるでしょう。(新卒の初任給は恐らく当時と比べ二十五〜三十倍になっている)その土曜会も先人が欠けるに從い、神谷恭さん、山崎安治さん、名児耶達男さん等と数々の世話人さんの手を経て、現在は河野幾雄さんに引継がれておりますが、何分にも世話役の数も少なく孤軍奮闘しておられる現況です。従って最近では人気も今一つで、あまり人も集

まらないようになってしまいました。

そこで起死回生を計る企画として浮上したのが今回のサッポロビール工場見学です。中村太郎さんのお世話で二月六日(土)に総勢三十六名の会員が工場へお伺いしました。当日は春一番の吹き荒れる大変暖かい日で、まさにビール日和の一日でした。最寄のJRの駅まで会社バスでお迎えを受けて工場へ到着しますと、早速工場内の素晴らしい劇場で天井一杯に広がるマルチスクリーンに映し出されるビールの映画を見たり、美しいマリネレディーに案内されて広い工場を端から端まで見学させていただき、最後に特別応接室で、出来たてのビールを飲みながら「おいしいビールの飲み方教室」のレクチャーを受け、心ゆくまで試飲させて戴きました。

た。まことに楽しい一日でした。中村太郎さんやサッポロビール関係者の皆様には心よりお礼を申し上げると共に、今後の土曜会運営に会員の皆様のご協力をお願いする次第です。お酒は文化です。そしてお酒を飲むということは大事なクラブライフの一環だと思っています。四十年も続いた土曜会の灯を消してしまう訳にはいかないと、思いますので、どうぞ皆様の応援をお願いいたします。飲むことの好きな方、土曜日の三時から集まって下さい。年齢やキャリアは関係ありません。好きなお酒を飲み、好きな山の話をします。それだけで充分に楽しいはずですよ。そして多くの人が集まって戴き土曜会を大いに盛り上げようではありませんか。

北海道支部冬期山行

ニセコアンヌプリ

北海道支部

松飾りも解けぬうちから早々と山行計画を立て、一月十日には寒中見舞いを添えて支部会員にご案内状を発送することができた。今年も昨年に引き続き冬山スキー山行はJAC会員の船場氏の経営する「ロッジ望羊荘」をべー

スにニセコアンヌプリを滑りまくることとなる。いつもの年だと土曜日の午後札幌大通りのいつもの場所に集合なのだが週休二日制が定着し、土曜日朝早くからそれぞれ出発し現地集合となった。都合のつく人は、二月十一日から三泊四日のロングランとなり、十四日帰り組まで入れると総勢二十四名の参加となった。今年も例年より若干雪が少なかったが、ニセコでは申し分ないパウダース

ノーに恵まれて、先発組は十一日から存分に滑り、とくにビシッとシバレルなかでのナイターは大満足のいたりだった。十三日は遠来の函館組が朝から到着してゲレンデを所狭しと滑りまくり、今シーズン新設したニセコひらふスキー場の花園コースがよく整備されていて滑りやすく評判が良かった。午後からは続々と集まり、十三日午後六時には恒例のお天気がまつり(会食)を開くことができた。これまでの三日間は吹雪でニセコアンヌプリの頂上を見る事が出来なかつたので、明日のツアーのために盛大な宴が夜の更けるまで延々と続き明日の晴天を祈った。十四日はその甲斐あってか晴天に恵まれ気温マイナス五度無風の絶好のスキー日和となった。リフトの運転開始を待ち切れなくロッジを出て、山スキー組十一名はリーダー中村喜吉氏の指示のもと午前九時にリフトを乗り継いでニセコアンヌプリ頂上に向かった。ゲレンデスキー組六名はリーダー横内泰美氏の指示で山スキー組をリフト終点まで共にして見送り、新設の花園コース主体にスキーを堪能した。山スキー組は頂上から北斜面の大滑降を楽しみ、とくに牧田氏の家族海香さん十六歳の滑りは素晴らしかった。このあと五色温泉に下り見返り坂経由

で午後二時全員無事にロッジに戻り、その後ゲレンデスキーも楽しみ現地自由解散となり夜にはそれぞれ無事に帰宅した。参加者 石崎貞子、石丸芳子、稲川晃、遠藤千利、奥津昌哉、樺田俊二、桜井仁、佐伯節子、中村喜吉、沼崎勝洋、長谷川謙吾、羽根田二郎、平野明、本多矩、牧田吉明、牧田滋子、牧田海香、牧田しずか、牧田遥、真下誠二、水科行雄、宮本美織、柳田涼子、横内泰美、計二十四名 (水科行雄) 秋山観月山行 十月十一日 北海道支部 恒例のお月見山行は新得のトムラ登山学校に一泊して翌日、北日高の芽室岳で行なった。当日は晴天に恵まれて北日高の展望を楽しめ皆大喜びであった。七十歳以上の方も二名参加しているのでマイペースで登り三時間十五分で頂上到着。日高の山は殆んど道がついてないので沢登りが主体であるが、芽室岳は数少ない道のある山で、日高山脈を知る上で展望も良く初心者にも楽しめる山である。参加者 小須田、芳賀、野田、平野、

岸、福島、高橋(恒)、沢尻、清水(国)、小野、横内、坂田、大山、藤野、中嶋、大久保、石崎、長谷川(啓)、亀井、柳田他十三名
(大久保五郎)

丹水会第二十三回例会報告

秋の御正体へ六十名

十一月二十八日に山梨県道志村長又にて秋の丹水会例会が開催され翌日二十九日には丹沢に連なる山として、「御正体山」の登山が行われました。集会は、民宿松葉に参加者六十九名を集めて午後六時より幹事の古谷さんの司会でスタート。会の世話役の鳥居



御正体山頂にて

先生より開会の挨拶を受け、この後普段なら定例の勉強会のはずが今回は、乾杯を片岡さんの音頭で行った後講演会がスタート。

演題は「医師から見た中高年の登山」で神奈川県がんセンターの堀井ドクターです。昨年シルバー・タートルのメンバーで自らも参加されたチョー・オユー峰の登山隊の例をあげて医師の立場より具体的に説明され、全体的に中高年登山万歳ということでお話していただきました。また、近藤先生および今回初参加の山梨県山岳連盟の前嶋さんの富士山(五合目整備計画)を守ろうとの訴えと署名の話も出席者の賛同をえて会場で行われました。この後は、恒例の初参加者の紹介等を行い夜遅くまで酒を酌み交わしながらの語らいが行われました。

明けて二十九日の朝は昨日の雨がうそのようにあがり、絶好の登山日和これも丹水会に参加の皆様の日頃の精進の良さと皆で自己満足。

朝食をすませ、恒例の記念写真を小林碧さんをお願いし六十名の登山隊は十数台の車に分乗して出発。ルートは道志の白井平よりの御正体山への最短コース。標高差約八百メートルの尾根を登り十二時過ぎに道志山塊の最高峰に到着。

さっそく鍋釜を出してうどんや雑炊

をつくるものもあったが、やはり最初は持参のビールで乾杯。これを楽しみに山に登る人の笑顔に改めて感心。

山頂は、大人数ながら小広いためゆったりと昼食休憩をとることができたが、展望には恵まれなため山伏峠のほうにしばらく歩き、樹林の合間より雪を頂いた南アルプスの山々を垣間見ることができました。

帰途は、同じコースを丹水会のホームゲレンデである丹沢の山々を正面に見ながら下山。全員無事宿で合流し、次回また来年の春会うことを約束し幹事の挨拶で解散しました。(山本正基)

・会務報告

二月定例理事会

二月九日(火)十八時半
場所 本会会議室

出席者 山田会長、藤平、松田副会長、小倉(茂)、大森、大倉、入澤、石橋、小倉(厚)、村井、穴田、山口、南川、藤井、山本、片岡各理事、飯野、中島監事、橋本、斎藤各常任評議員
(委任)重廣、神崎、関口、伊丹各理事、嶋原、湯浅、西村各常任評議員
議事に先立ちアンケートブックウオーク隊、吉川隊長、松原、佐野両隊員の三名から本会へのお礼の挨拶があった。

◆議事

(審議事項)

一、ナムチャバルワ登山隊会計監査について(飯野)

理事会に先立ち本日、午後四時より一九九二年ナムチャバルワ登山隊の会計監査を行った結果正確、妥当である旨報告があった。 承認

二、「登山特別基金」の「海外登山基金」への繰り入れについて(大倉)

八十周年記念事業の剰余金(一七、四八〇、〇〇〇円)を積立金に計上してあったが、海外登山の助成事業が軌道に乗ってきたので「海外登山基金」に繰り入れ、助成事業を強化発展させたい。 承認

三、平成五年度予算案について(大倉)
各委員会第一次予算の集計結果について提示があり、財務担当が各委員予算原案に基づき個別に折衝する。 承認

(報告事項)

一、秩父宮記念学術賞選考結果について(小倉)

第二十九回(平成四年度)学術賞は日本考古学協会から推薦された「古代山岳信仰遺跡の研究―日光山を中心とする山頂遺跡の一考察」に対し授与されることに決定した旨連絡を受けた。
二、会員募金について(二月九日現在)(石橋)

書籍・雑誌 受入報告 1992年12月・1993年1月分

著者	書名/雑誌名	版型・ページ	出版元	出版年	寄贈/購入別
	The Alpine Journal 1992/93	A 5/361 p.	The Alpine Club	1992	
	The American Alpine Journal 1992	A 5/325 p.	The American Alpine Club	1992	発行者寄贈
James. A Wilkerson(edited)	Medicine for Mountaineering	A 5/46 p.	The Mountaineers	1992	購入
湯口康雄	黒部奥山史談	A 5/257 p.	桂書房	1992	発行者寄贈
阿部恒夫	アルプス日記	A 5/326 p+Ⅻ	日本山書の会	1992	著者寄贈
グレイ・D.M. メール・D.H. 松田益義・訳	防雪技術ハンドブック	A 5/208 p.	築地書館	1990	大森同作氏寄贈
内田すえの 此川 純子 堀江 節子 高橋 敬市	黒部・底方の声 黒三タムの朝鮮人	A 5/308 p.	桂書房	1992	発行者寄贈
	立山明燭	B 5 変型/60 p.	桂書房	1992	発行者寄贈
	梅里雪山	A 5/470 p.	京大学士山岳会	1992	発行者寄贈
白旗史朗	白旗史朗の光彩尾瀬	23×30/107 p.	新日本出版社	1993	発行者寄贈
	'92 雪上散歩 No. 2	B 5/134 p.	アルパインスキー クラブ	1992	発行者寄贈
	遊歩百山 1	B 5/134 p.	山と溪谷社	1990	著者寄贈
	遊歩百山 2	B 5/144 p	山と溪谷社	1991	発行者寄贈
	遊歩百山 3	B 5/144 p.	"	1992	発行者寄贈
	遊歩百山 4	B 5/144 p.	"	1992	発行者寄贈
	遊歩百山 5	B 5/144 p.	"	1992	発行者寄贈

瀬秀郎(八)、加納
巖(四)、坂井美江、
山上皓一郎、池田知
幸(四)、佐藤辰雄、
宮本忠直(四)、大
貫金吾、川脇幸子、
(二口)石森芳太郎、
中澤喜久郎、鈴木義
男、甲斐鴨一郎、浅
野清彦(三)、浅野
初子(三)、川井照
子、成田幸雄、樋口
格(二)、金成忠、吉
川仁(二)、中野正
一、牧繁録(三)、
田中栄子(二)、田
中哲郎(二)、野々
口文子(二)、三戸
田一郎(三)、高島
眞一、中島文夫、秋
山宏明、手塚宗求、
和田誠一(三)、山本
一夫(三)、大向省
造、佐藤知恵子
(三)、今野昌雄、
田辺昭雄、西山秀夫
(二)、金谷信司、
大口瑛司、松野賢珠
(三)、今沢寛、及
川昭、長尾幸七、荒
金通子、坂本美弥

期日 平成五年五月八日(土)・九日(日)

◎中高年懇親山行
越後坂戸山
第二回赤シャツの集い



この電話で
もお知らせ
しています

(二)、佐藤晴夫、武井清(三)、津田
美也子、森本市郎(三)、細川沙多子
(三)、横山宏太郎(三)、鶴見敏彦
(三)、塚田和男、三井尚、登坂信雄、
建石八重、長尾武彦、高橋実万(二)、
山上郁子、北林幹男、東真澄、伊藤義
男、弥栄山岳会、山口英一、橋野達雄、
辻田代史雄、沼田正(二)、星勝雄
(二)、西牧康(三)、兼岩良保、(〇
・六口)新村貞男(二・六)、大島省
吾、猪股鎮夫(二・六)、会沢佳昭、中
俣正夫、飯田勝之(二・六)、辻川真、
三上正治(二・六)、森沢堅次、酒井
秀紀、小池潜、森田準之助、(〇・四口)

次代に残そう美しい山と溪

福田哲郎、安藤信正(二・四)、開発秀
三(二・四)

なお、本紙二月号でお知らせした松
田敏男会員の版画「旧山研」を早速次
の三名の方々が購入されましたので、
同会員より三万円の寄付がありました。
購入者 添田啓一、小倉茂暉、神
崎忠男

(累計二千五百一名、七千六百六十三
・九口、三千八百四十一万九千七百三
十九円)

なお、この募金の免税措置は、本年
三月末をもって、終了いたしましたの
で、ご承知ください。

場所 新潟県六日町清水「雲天」泊
山行 坂戸山(城址) 巻機山麓周辺
巻機山麓周辺で山菜採集して、翌日
は坂戸山へ軽い山歩きをします。
中高年者の懇親山行です。赤シャツ
着用大歓迎です。雲天民宿の山菜料理
をこ期待下さい。花・味覚・地酒も…
申込 ハガキにて左記へ四月末迄に。
宛先 杉並区下井草五一〇―五
(坂倉登喜子へ)
係(河野、内藤、坂倉)
主催 土曜会

●第十七回若葉会山行 「岩岳山」のお知らせ

(集委会員会)

本年の若葉会山行は、静岡支部との共催により南ア深南部前衛の山「岩岳山」を訪れます。ここはヤシオツツジの群落で有名なところで、この時期はシロヤシオが期待できます。東京からは貸切バスを仕立てますので、せいぜいご利用下さい。

実施要領

◆期日 平成五年五月二十二日(土)～二十三日(日)一泊二日

◆山 岩岳山(一三六九・三才)

◆地図 二万五千図「気田」高郷

◆歩程 約四時間半 難易度 中級

◆宿舎 ログペンション「シンフォニー」静岡県周智郡春野町奥春野郷いわたけの里四一五―八

◆会費 〇五三九―八四―〇〇五六

一、〇〇〇円(現地参加)

二、〇〇〇円(東京よりバス利用の場合)

◆申込 事務局気付集委会員会あてハガキに、氏名、会員番号、年齢、バス利用の有無を明記して申込み下さい。折返し詳細案内をお送りします。バス定員五十名にて締切らせて頂

ます。なお、静岡支部の方は、水野公男宛に直接申込み下さい。

◆会費振込 左記あての会費振込入金をもって正式な申込みとさせていただきます。

さくら銀行新宿御苑前支店
普通預金口座

八四〇―五四八六〇―一

名義 日本山岳会集委会員会

委員長 川 善市

五月十二日(水)までに振込んでください。

◆その他 集合 新宿スバルビル前

午前七時三十分

出発 午前八時の予定

二十二日昼食は自弁。二十三日昼食は会で弁当を用意します。

平成五年四月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話東京(326) 四四三三

振替口座 東京三―四八二九番

東京都港区赤坂一―三―六

印刷所 株式会社 技報堂